

今週のメニュー

■トピックス

◇海外 WG の活動 — その 1 — PVC 安全衛生連絡会について

■随想

◇ららら、プラスチック (20)

マイボトル用給水器の普及 — 横浜市等の取り組み

元 日本プラスチック工業連盟 専務理事 岸村 小太郎

■トピックス

◇海外 WG の活動 — その 1 — PVC 安全衛生連絡会について

今回は、塩ビ工業・環境協会 (VEC) 海外 WG の 1 つの活動である PVC 安全衛生連絡会について報告させていただきます。

この連絡会は、2026 年 5 月開催で、第 235 回目を数えています。第 1 回目の開催が、2006 年 10 月ですので、今年の 10 月で満 20 年を迎えることとなります。第 1 回目の開催から、今まで 1 回もスキップすることなく、月 1 回の開催を続けております。現在では、オンライン会議のシステムも発展し、殆どオンラインでのリモート会議となっています。対面で行うのは 7 月と 12 月の 2 回のみ、対面での会議後、懇親会を開催しております。コロナ禍でのオンライン会議システムの発展が無ければ、毎月、会場設定、参加者の出欠確認等、準備が非常に大変だったろうとつくづく思います。

この連絡会の歴史としては、第 1 回目の開催の記録では、構成メンバーは、塩ビ食品衛生協議会 (JHPA)、塩ビ工業・環境協会 (VEC)、塩化ビニル環境対策協議会 (JPEC)、アジア太平洋ビニルネットワーク (APVN) で、目的は「PVC 業界全体に資する安全衛生情報に関する意見交換と情報発信を行うこと」との記載があり、この方針は今でも受け継がれています。当初は、JHPA の石動さんが発起人として、この連絡会を立ち上げましたが、2021 年 3 月末に、JHPA が解散となったため、その後、VEC が引継ぎ、2021 年 4 月より VEC 主催の連絡会となっております。以前は、JHPA 石動さん (現在は、一般財団法人 化学研究評価機構 (JCII) に所属) からの報告のみでしたが、VEC 主催となった時から、VEC の海外 WG から海外情報の報告を行っております。現在の構成メンバーとしましては、可塑剤工業会、日本ビニル工業会、日本無機薬品協会、スズ化合物環境技術協議会、および JCII、VEC となっております。

この連絡会がスタートした 2006 年は、ヨーロッパで REACH 規制が確定し、また有機スズ系安定剤の規制が行われる等のトピックスが熱かったようです。最近では、残留有機汚染物質に関するストックホルム条約 (POPs 条約) での中鎖塩素化パラフィン、

UV-328 等が附属書 A 廃絶に掲載され、その後の各国の対応、またヨーロッパでの ELV 規則、PPWR 規則、米国でのフタル酸エステル類の規制等がホットな話題となっています。

これからも、今まで同様に月 1 回の開催を続けていき、300 回、400 回と開催し、PVC に関連する海外法規制、また日本国内でのプラスチックの規制情報等を含め、参加者メンバーに有益な情報を発信、共有していきたいと考えています。

(江崎)

■ 随想

◇ららら、プラスチック (20)

マイボトル用給水器の普及 — 横浜市等の取組み

元 日本プラスチック工業連盟 専務理事 岸村 小太郎

中東危機によるナフサ不足を背景に、プラスチックや化学製品の供給不安や価格高騰に関する話題が連日報道されている。その中で特に気になった話題の一つが、製菓大手のカルビーが主力製品であるポテトチップスのパッケージの印刷を白黒 2 色に変更したことと、これに対する官邸サイドの反応だ。

「パッケージはセールスマンである」。これは、関係業界ではよく知られた言葉だ。パッケージの最大の役割は中身の保護だが、消費者にその製品を購入してもらうためには、消費者の目に留まり、手に取ってみたいくなる魅力のあるデザインのパッケージが必要になる。その点では白黒のパッケージはかなり不利だが、同社のポテトチップスのように、既に多くの消費者に受け入れられている人気商品であれば、その影響は小さいとの判断もあったのだろう。

この動きに対し、官邸幹部が「売名行為だ！」と批判している。政府としては「ナフサは不足していない」（すなわち、印刷インキも不足していない）と説明しているため、印刷インキ不足を前提とするようなデザイン変更は不都合な訳だ。

“売名行為”とはあまりお行儀の良い表現ではないが、白黒印刷への変更が話題作りはなっているのは間違いない。この変更により、消費者からは「無駄を省いている」（それによって、値上げを抑えている）と評価されている。

ところで、中東危機をきっかけに、“ナフサ”という言葉がマスコミや国会審議の場でも頻繁に登場するようになった。従来であれば“石油”で一括りにしていたはずだが、“石油不足”と言ってしまうと、かつてのオイルショックの時のようなパニック状態が再現しかねないので、ほとんどの国民にとって馴染みのない“ナフサ”という言葉を使っているのだろう。実際に国内で使用されるナフサは、原油から精製されたものより、ナフサとして輸入されたものの方が多いので、確かに間違いや嘘ではないのだが・・・。

筆者が CLOMA[※]のワーキング・グループ（WG）に参加していることは本随想の[連載 17（No.801 2025 年 6 月 12 日）](#)でも触れているが、この WG の活動の柱の一つに、「リユースカップの普及」がある。今回の“ナフサ問題”をきっかけに、リユースカップ・容器の普及が広がるものと期待している。

※クリーン・オーシャン・マテリアル・アライアンス； 海洋プラスチック問題の解決に向け、プラスチック製品の持続可能な使用や、代替素材の開発・導入を推進することを目的に、業種を超えた連携によるイノベーションを加速するためのプラットフォーム。

CLOMA のこの WG では、昨年 12 月に横浜市役所を訪問し、同市が取り組んでいる「市役所プラ・チャレンジ」について取材をしている。

「市役所プラ・チャレンジ」は、「マイボトルチャレンジ」と「プラスチックごみのリサイクル」の 2 本立てで、「マイボトルチャレンジ」は、使い捨て飲料容器の削減を目的に、職員が率先してマイボトル・マイカップを利用することを促すもので、職員の行動目標として「2025 年度末までにマイボトル等保有率 100%」を挙げているが、取材の時点で既に職員（約 6,000 人）の 9 割以上がマイボトルを持参しているとのことだった。職員によるマイボトルやマイカップの持参を促すために、2025 年 4 月から市庁舎に 3 台の給水機を設置しており、給水機では 1 日あたり約 500 リットルが消費され、4～10 月の 7 ヶ月間の利用実績は、500ml ペットボトル換算で約 168,000 本とのことだった。

横浜市では市庁舎だけでなく、市内の区役所や市立中学校・高等学校に約 200 台のマイボトル対応型給水機を設置していく計画で、500ml ペットボトル換算で月間 100,000 本分以上の削減を目指しているが、更に市民が利用する他の施設への設置も進めていきたいとのことだった。

また、給水機だけでなく、マイボトル用のコーヒーサーバーも庁舎内に設置しただけでなく、市庁舎ビルの 1～3 階に出店しているカフェの全店（5 店舗）でもマイボトルへの飲料提供を実施している。

取材内容の詳細は「月刊廃棄物」（日報ビジネス社）2026 年 2～3 月号に寄稿しているので、興味のある方は参照されたい。

マイボトル用給水器の設置は、東京都のいくつかの区でも進んでいる。

これは CLOMA の活動ではなく、私が合唱団の練習で使っている公共施設でたまたま見つけたのだが、文京区や板橋区の区有施設にマイボトル用給水機が設置されている。その詳細は、ペットボトルの削減効果（消費された水の量から計算した 500ml ボトルの本数）を含め、各区の web サイトで公表されている。

文京区； <https://www.city.bunkyo.lg.jp/b038/p007540.html?sfnsn=mo>

板橋区； <https://www.city.itabashi.tokyo.jp/bousai/kankyo/ondanka/1032936.html>



文京区アカデミー茗台にて
(2026年1月 筆者撮影)



板橋区まなぼーと大原にて
(2026年4月 筆者撮影)

■ 関連リンク

- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)

※本メールマガジン上の文書・画像等の無断使用・転載を禁止します。



■ 東京都中央区新川 1-4-1

■ TEL 03-3297-5601 ■ FAX 03-3297-5783

■ URL <https://www.vec.gr.jp> ■ E-MAIL info@vec.gr.jp